考へもの

お酒呑が餘所から自分の好物を貰ったから、一人で片付けて仕舞ふのも惜しいものと思って、友達をよびにやりました。其手紙が次の樣なのです。

十字横月　水邊有酉　二人上木
口近於天

どう云ふ意味でせう？？

忠義な犬の話

やまとの翁

動物の話の中でも、殊に犬の話……忠義な犬や賢い犬の話は隨分澤山ありますが、今翁がお咄せうといふ樣なのは、先づ少いでせう。

佛蘭西の田舍で、ある一人の商賣人、隣村まで貸金の催促に行からと思って、或日のこと、馬に打ち乘り、日頃の愛犬を連れて出かけた。やがて向うへ行って、首尾よく金を受取ったので、其金袋を大事にしっかりと、鞍の前の處へ結び附けて、氣もかる〳〵と再び家路をさして馬を歩ませた、犬も主人の心を知ってか、前に立って見たり、後へ廻はったり、跳ったりはねたり、或は吠へて見たりして、喜んで居る。

さて二三里も行ってから、先づ一休といふので主人は兎ある木蔭で、馬から下りて、止せば宜しのに、大事の金袋だからといふので、それを馬から下ろして自分の側へ置いて、而して煙草など喫んで方々を眺めて居る。馬は此間にと思って、其邊の草を無暗と食べて居る、犬は『あゝ勞れた』といふ風で、主人の側で前足を思ふ存分伸ばして、而して赤い舌を垂らして「ハッハッ」と息ついて居る。